Сергей Довлатов

わが家の人びと

ドヴラートフ家年代記

セルゲイ・ドヴラートフ
沼野充義訳

成文社

江苏工业学院图书馆
藏书章

わが家の人びと

ドヴラートフ家年代記

セルゲイ・ドヴラートフ
沼野充義訳

成文社

訳者紹介

沼野　充義（ぬまの・みつよし）

1954年東京生まれ。東京大学大学院でロシア文学を専攻、1981年から85年にスラヴ文学研究のためハーヴァード大学大学院に留学し、ロシアや東欧からの亡命者とばかり付き合いながら、自分も半ば亡命ロシア人のような気分で4年間を過ごす。1987-88年、ワルシャワ大学日本学科客員講師。現在、東京大学文学部助教授。専門は、ロシア・ポーランド文学、文芸評論。

主な著書　『永遠の一駅手前――現代ロシア文学案内』（作品社）、『スラヴの真空』（自由国民社）、『ＮＨＫ気軽に学ぶロシア語』（ＮＨＫ出版）、『モスクワーペテルブルグ縦横記』（岩波書店）、『屋根の上のバイリンガル』（白水社）など。

主な訳書　ブロツキー『大理石』（白水社）、レム『完全な真空』（国書刊行会、共訳）、トルスタヤ『金色の玄関に』（白水社、共訳）、ワイリ、ゲニス『亡命ロシア料理』（未知谷、共訳）など。

編書　『ユートピアへの手紙――世界文学からの20の声』（河出書房新社）、『世界の歴史と文化　中欧』（新潮社）、シリーズ・世界文学のフロンティア（全6巻、岩波書店、共編）など。

わが家の人びと――ドヴラートフ家年代記

1997年10月25日　初版第1刷発行

訳　者　沼野充義
発行者　南里　功

発行所　成文社

〒240　横浜市保土ヶ谷区天王町2-42-2
3-1015号

電話　045（332）6515
振替　00110-5-363630

組　版　編集工房dos.
印　刷　宮嶋印刷
製　本　石津製本

落丁・乱丁はお取替えします

© 1997　沼野充義　Mitsuyoshi Numano　Printed in Japan

ISBN4-915730-20-4　C0097

わが家の人びと――ドヴラートフ家年代記

【目次】

1 イサークおじいさん 7
2 ステパンおじいさん 15
3 ロマンおじさん 23
4 レオポルドおじさん 34
5 マーラおばさん 56
6 アロンおじさん 67
7 母 79
8 父 97

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

9 いとこのボーリャ 112
10 グラーシャ 147
11 レーナ——これは愛じゃない 163
12 カーチャ 188
13 ニコラス——結び 198
訳者解説 199

装画……塩井浩平
装幀……山田英春

主な登場人物

セルゲイ（愛称セリョージャ）・ドヴラートフ　この物語の語り手。レニングラードに住む。小説家を志すが、ソ連では作品を出版できず、最後にはアメリカに亡命する。

イサーク　父方の祖父。ユダヤ人。ウラジオストックに住んでいた。

ステパン　母方の祖父。グルジアのトビリシに住む。アルメニア人。

ロマン　母方のおじさん。ステパンの息子。トビリシの「遊び人」。

レオポルド　父方のおじさん。イサークの末っ子。ペテン師の才覚を持つ。ベルギーで実業家になった。

マーラ　母方のおばさん。ステパンの娘。出版社で名編集者として活躍する。

アロン　マーラおばさんの夫。共産主義者。

ノルカ　母。初め俳優として舞台に立つが、後に出版社の校正係。

ドナート　父。俳優、演出家、バラエティショーの台本作家。

ボーリャ（ボリス）　いとこ。共産党高官とマーラの不倫の落とし子。

グラーシャ（グラフィーラ）　犬。

レーナ　妻。

カーチャ　娘。

ニコラス・ドウリー　ニューヨークで生まれた息子。アメリカ市民。

わが家の人びと——ドヴラートフ家年代記

«НАШИ»

Copyright © 1983 by Sergei Dovlatov

All rights reserved.

This book is published in Japanese by arrangement with The Wylie Agency (UK) Ltd.

Japanese edition Seibunsha Ltd., Publishers, Yokohama, 1997.

1　イサークおじいさん

ひいおじいさんのモイセイは、スホヴォ村の農家の生まれだった。ユダヤ人で農民、というのは、まあ、かなり珍しい組み合わせだろう。極東ではそういうこともあったんだな。

その息子イサークは、町に出てきた。そうしてまた物事の成り行きは、普通になったというわけ。

始めのうちイサークはハルビンに住んでいて、そこでぼくの父が生まれた。それからウラジオストックに移って、町の中心に住んだ。

始めのうちおじいさんは、時計とか家庭雑貨やらの修理をしていた。それから印刷の仕事をするようになった。植字工頭（かしら）といったところだったらしい。その二年後にはスヴェトランカ通りの軽食堂を買い取った。

となりにはザマラーエフの店があった。「聖酒（ネクター）、香酒（バルサム）」という看板の出ている酒屋だ。おじいさんはしょっちゅうザマラーエフのところに入り浸っていた。仲良しの二人は酒を飲み、哲学の

話題に花を咲かせた。それからおじいさんの店に来て、酒の肴を食べた。それからまた、ザマラーエフの店に戻って……。

「おまえはほんとにいいやつだよ」と、ザマラーエフは口癖のように言った。「ユダヤ人だけどな」

「ユダヤ人は父方だけさ。母方はオランダ人なんだ！」と、おじいさんは言い返したものだ。

「おや、まあ！」我が意を得たり、といった様子でザマラーエフが応じた。

一年後に二人は酒屋を飲みつくし、食堂を食べつくしてしまった。

年老いたザマラーエフは息子たちを頼って、エカテリンブルクに去った。うちのおじいさんは戦争に行った。ちょうど日露戦争が始まったところだった。

ある閲兵式で、おじいさんは皇帝陛下の目に止まった。なにしろ身長が二メートル十センチくらいもあったので。口の中にりんごを丸ごと入れることもできた。長くのびた口ひげは肩章にかかるほどだった。

皇帝はおじいさんのそばに寄ってきた。それから、にこにこしながら、指で胸をつついた。

おじいさんは即座に親衛隊に抜擢された。親衛隊にユダヤ人なんて、ほかには一人もいなかったんじゃないかな。おじいさんは砲兵隊に編入された。

馬がへたばってしまうようなことがあれば、おじいさんが馬のかわりに沼で大砲を引いた。

あるとき砲兵隊が突撃作戦に参加することがあった。おじいさんは敵に向かって突っ込んでい

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

った。大砲が援護射撃をするはずだった。ところが大砲はいっこうに火を吹かない。なんと、おじいさんの背中が大きすぎて、敵陣が見えなかったというんだ。

前線からおじいさんは口径〇・三インチのライフル銃とメダルを何個か持って帰った。聖ゲオルギー十字勲章まであったとかいう話だ。

まる一週間、おじいさんは派手に飲みまくった。それから「エデン」というレストランに給仕長として勤め始めた。そこであるとき、気のきかないウエイターと喧嘩になったことがある。おじいさんは怒鳴りだした。げんこつで机をどんと叩いた。そうしたら、げんこつは机の中にめり込んで、引き出しの中にはまってしまった。

うちのおじいさんは、だらしないことが嫌いだった。だから、革命にも否定的な態度をとった。それどころか、革命の進行を少しばかり遅らせさえもした。それはこんないきさつだ。

町外れから蜂起した人民大衆が町の中心に押し寄せてきた。おじいさんは、すわユダヤ人虐殺（ポグロム）だ、と早合点してしまった。そこでライフル銃を取り出し、屋根に登った。そして人民大衆が近づいてくると、銃を撃ち始めた。こうしておじいさんは、ウラジオストックの住民のなかで、ただ一人、革命に抵抗することになった。とはいうものの、革命はそれでもやはり勝利を収めた。人民大衆は回り道してあちこちの横町から町の中心に押し寄せていったのだ。

革命後、おじいさんはおとなしくなった。再び慎ましい職人にもどった。本領を発揮することもたまにしかなかった。たとえば、あるとき、「メルハー、メルハー&カンパニー」というアメ

リカの会社の評判をだいなしにしたことがある。
このアメリカの会社は日本経由で極東に、折り畳み式ベッドを運んできたのだった。もっとも、それを「折り畳み式ベッド」と呼ぶようになったのは、だいぶ後のことだけれども。当時これはセンセーショナルな新製品だった。「マジック・ベッド」なんて商品名がついていたくらいだ。
その折り畳み式ベッドは、だいたい今のものと同じような外見だった。花柄の防水布が張られ、スプリングとアルミニウムのフレームがあって……。
新しがり屋のうちのおじいさんは、繁華街に出かけて行った。ベッドは特別に作られた高い台の上に陳列されていた。
「皆様にお目にかけますのは、アメリカからの新製品！」店員が叫んでいた。「独り者の夢！　かけがえのない旅の友！　ゆったり、ふかふか！　お試しになりますか?!」
「なるね」と、おじいさんは言った。
そして紐もほどかないで靴を引っ張って足からはずし、横になった。
めりめりっという音が響き、スプリングがきいきい鳴った。おじいさんは床の上に落ちていた。
店員はあわてずに平然とした様子で微笑みながら、もう一台のベッドを広げて見せた。
しかし、まったく同じ音が繰り返されただけだった。おじいさんは背中をさすりながら、ぶつぶつ悪態をついた。
店員は三台目の折り畳み式ベッドを目の前に置いた。

今度はスプリングはなんとか持ちこたえた。そのかわり、アルミの脚が音もなく、へなへなと曲がってしまった。おじいさんは軟着陸した。やがて店は奇跡のベッドの残骸の山で埋めつくされた。色とりどりの防水布の切れ端が垂れ下がり、折れ曲がったアルミ製の脚がぼんやりと光っていた。

おじいさんはちょっと値段をかけあってからサンドイッチを買い、立ち去った。

かくして、アメリカの会社の評判はだいなしになった。「メルハー、メルハー&カンパニー」はクリスタルのシャンデリアを売るようになったとか……。

イサークおじいさんは、たいへんな大食漢だった。棒型の大きなパンは横にではなく、縦に切った。人の家にお客に行ったときは、ラーヤおばあさんがいつも恥ずかしい思いをさせられた。人の家に行く前に、おじいさんはちゃんと食事をしていった。でも、それでもだめだったのだ。パンは二つ折りにして食べたし、ウォッカはクリーム・ソーダ用のグラスで飲んだ。デザートのときになっても、まだ中身が残っている前菜のゼリー寄せの皿を下げないように頼んだ。そして家に帰ると、ほっとして夕食をとったのだった……。

おじいさんには三人の息子がいた。末っ子のレオポルドは、若いころ中国に行ってしまった。そして、中国からベルギーへ。彼についてはまた別に話をすることになるだろう。

上の二人、ミハイルとドナートは芸術に惹かれた。二人してウラジオストックなどという僻地を捨て、レニングラードに住みついた。彼らの後を追って、おばあさんとおじいさんもレニング

ラードに引っ越していった。
二人の息子たちは結婚した。おじいさんと比べると、二人ともひよわで頼りなく見えた。二人の嫁さんたちはどちらも、おじいさんにまんざら気がないわけでもなさそうだった。
おじいさんは今度はアパートの管理人のような仕事におさまった。夜は時計や電気こんろの修理をした。そして、相変わらずすごい力持ちだった。
あるとき、シチェルバコフ横町でトラックの運転手に口汚く罵られたことがあった。なんでも、「薄汚ねえユダ公」とかなんとか言われたらしい。
おじいさんはトラックの側板をつかんだ。そうして一・五トン積みのトラックを止めてしまったのだ。運転席から飛び出してきた男を脇に退け、バンパーを持ってトラックを持ち上げた。そして道をいっぱいにふさぐようにトラックを転がした。
トラックのヘッドライトは公衆浴場の建物に突っ込み、荷台の後部はシチェルバコフ公園の柵に突っ込んでいた。
運転手はなにが起こったかわかって、泣きだした。泣いたかと思えば、ただじゃおかないぞと脅したりもした。
「ジャッキで動かしてやるさ！」と、彼は言った。
「やれるものならな……」とおじいさんが答えた。
結局トラックはまる二日の間、横町をふさいだままだった。それからようやく、クレーン車が

やってきた。

「そんなやつには一発食らわせてやりゃ、それでよかったんじゃないの」と、父がたずねた。

おじいさんはちょっと考えて、こう答えた。

「つい我を忘れて殴りすぎちまうのが怖くてね……」

さっきも言ったように、末っ子のレオポルドはベルギーに行っていた。あるとき、彼のところから人がやって来た。モーニャという名前の男だ。モーニャはおじいさんにタキシードと、空気を入れて膨らませるゴム製のばかでかいキリンを持ってきた。後でわかったことだが、キリンは帽子掛けだった。

モーニャは資本主義の悪口をさんざん言って、社会主義の工業生産に感嘆し、それから帰っていった。間もなく、おじいさんはベルギーのスパイとして逮捕されたのだった。刑期は十年。手紙のやりとりも許されない、厳しい十年の刑期だ。ということは、ようするに、銃殺を意味した。いや、どっちみち、生き延びることはできなかったろう。健康な男は、飢えにはなかなか耐えられないものだ〔レニングラードは第二次世界大戦中、九百日にもわたってドイツに包囲され、多くの餓死者を出した〕。まして、横暴で厚顔無恥な連中の仕打ちには、とても……。

二十年後に父はおじいさんの「名誉回復」のために、奔走を始めた。おじいさんは、「犯罪の事実なし」として名誉を回復された。

でも、それなら、あのときどんな事実があったというんだろうか。あの馬鹿げた愉快な人生は、

いったい何のために断ち切られたのか……。
ぼくはおじいさんのことをよく思い出す。会ったことは一度もなかったけれども。
たとえば、友だちの誰かが、あきれた口調でこんな風に言うことがある。
「よくもまあ、お前はラム酒を茶碗で飲めるなあ」
そのとたんに、ぼくはおじいさんのことを思い出す。
あるいは、妻がぼくにこんなことを言う。
「きょうはドンブロフスキーさんの家に呼ばれているのよ。あなたはその前に、ちゃんと食事をすませなければ」
すると、ぼくはまたもや、あの人間のことを思い出す。
刑務所の監房でも、彼のことを思い出した。
おじいさんの写真は何枚か手元に残っている。ぼくの孫たちは、家族アルバムのページをめくりながら、ぼくとおじいさんのことを取り違えることだろう……。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com